

—曖昧な日本語表現と内向き指向—

2018年のピョンチャン冬季オリンピックの日本の報道には、「日本メダル最多、史上最高」という言葉が溢れた。日本は勝った、勝ったの報道で、国民は日本の勝利に酔ったのかもしれない。

でも、私にはこの報道の言葉がピンと来なかった。「メダル最多」とは？これは、参加国の中で最多ということではなく、いままでの日本の冬季オリンピック参加中での最多なのであろうと推察されるが、曖昧な表現である。そこで少し今回のオリンピックを調べてみた。

表に順位1位から5位までと日本とを比較した。

順位	国名	メダル数	出場選手数	メダル/出場選手 (%)	総人口 (百万人)	メダル/国民総人口 (百万人)
1	ノルウェー	39	111	35	5	7.8
2	ドイツ	31	154	20	82	0.4
3	カナダ	29	225	13	36	0.8
4	アメリカ	23	242	9.5	326	0.07
5	オランダ	20	48	42	17	1.2
11	日本	13	124	10.5	126	0.1

この表から、ノルウェーが断トツであることが分かる。メダル数のみならず、出場選手あたりにしても（1人で数個のメダルを獲得している選手もいるが、一応、1人1個で計算）、また、国民総人口あたりにしてもである。さすが雪国の選手は強い。つぎに、目立つのはオランダで、出場選手あたりのメダル獲得数は断トツである。一方、アメリカ、日本は、出場選手あたりのメダル数と、総人口あたりのメダル数は、ほぼ同じである。ただ、アメリカの出場選手数は、日本の約2倍で、それだけ、メダル獲得数も多くなっている。アメリカは豊かである。

なぜ、ノルウェー、オランダが目立つのか。その原因を調べてみた。その結果、ノルウェーのメダル獲得主要種目は、クロスカントリー、アルペンスキー、ジャンプで、オランダはスピードスケート、ショートトラックになっている。ノルウェーやオランダのような小国では、その国の特色を生かして、集中的に力をいれている種目があるのだ。

話が脱線してしまったが、最近の日本の報道には内向きのものが目立つような気がする。第2次世界大戦前の日本も「唯我独尊」的な情勢の中で、世界の中での日本の力を見違えたのではなかったのでは。

蛇足だが、上のオリンピックの成績から、日本の大学あり方を考えるとき、その大学の特色を生かした選択と集中が必要ではないかと思う。